

CML 様の病態を呈した乳児急性リンパ芽球性白血病の一例

◎石原 美紀¹⁾、饒平名 聖¹⁾、島袋 末美¹⁾、渡嘉敷 良乃¹⁾、名護 珠美¹⁾、浜田 聡²⁾、百名 伸之²⁾、前田 士郎¹⁾
琉球大学病院 検査・輸血部¹⁾、琉球大学大学院医学研究科育成医学(小児科)講座²⁾

【背景】フィラデルフィア (Ph) 染色体上の *BCR-ABL1* は慢性骨髄性白血病 (CML) 発症の原因とされ、急性転化例においても検出される。*BCR-ABL1* は一部の急性リンパ芽球性白血病 (ALL) でも検出され、CML 急性転化と *de novo* 発症との鑑別は時に困難である。初発の乳児 ALL で CML 様の病態を呈した症例を経験したので報告する。

【症例】11 ヶ月男児。貧血、下肢の紫斑で発症し、肝脾腫および白血球増多、血小板減少から急性白血病疑いで当院紹介となった。

【検査所見】[末梢血] WBC 131,400 / μ L (Myeloblast 2.0%, ProMye 0.5%, Mye 5.0%, Met 4.5%, Stab 9.5%, Seg 14.0%, Ly 32.5%, Mo 6.0%, Eo 3.5%, Ba 2.0%, Blast 20.5%), Hb 4.1 g/dL, PLT 7,000/ μ L, LD 799 U/L [骨髄] Blast 70% (MPO 染色(-), FCM : CD10+, 19+, CD34dim, HLA-DR+), 末梢血、骨髄ともに好塩基球が増加傾向にあった。minor (m) *BCR-ABL1* mRNA 陽性、FISH で融合シグナル陽性 99.0%、核型 t(9;22)(q34.1;q11.2)を認めた。

【経過】Ph 染色体陽性 ALL と診断され、化学療法によっ

て血液学的寛解が得られたが、(m) *BCR-ABL1* mRNA は高値を維持していた。末梢血好中球 FISH を行ったところ、分葉核 92.0%、円形核 67.0%で融合が認められた。本例では *BCR-ABL1* を獲得した多能性造血前駆細胞がクローナルに造血しており、CML のリンパ芽球性急性転化に類似した病態が推察された。その後、第一寛解で造血幹細胞移植が施行され、(m) *BCR-ABL1* mRNA は一旦検出感度以下となったが、現在は 50 コピー/ μ g RNA で推移している。

【まとめ】好塩基球増多や末梢血未熟顆粒球の出現を示した CML-like *BCR-ABL1*-positive ALL の一例を経験した。本症例で認められた CML に関連する形態学的な所見は有用な臨床情報となり、積極的な情報提供が重要と考えられた。

本演題の一部は第 21 回日本検査血液学会学術集会抄録集にて発表した。

連絡先 <098-895-3331 (内線 3338) >